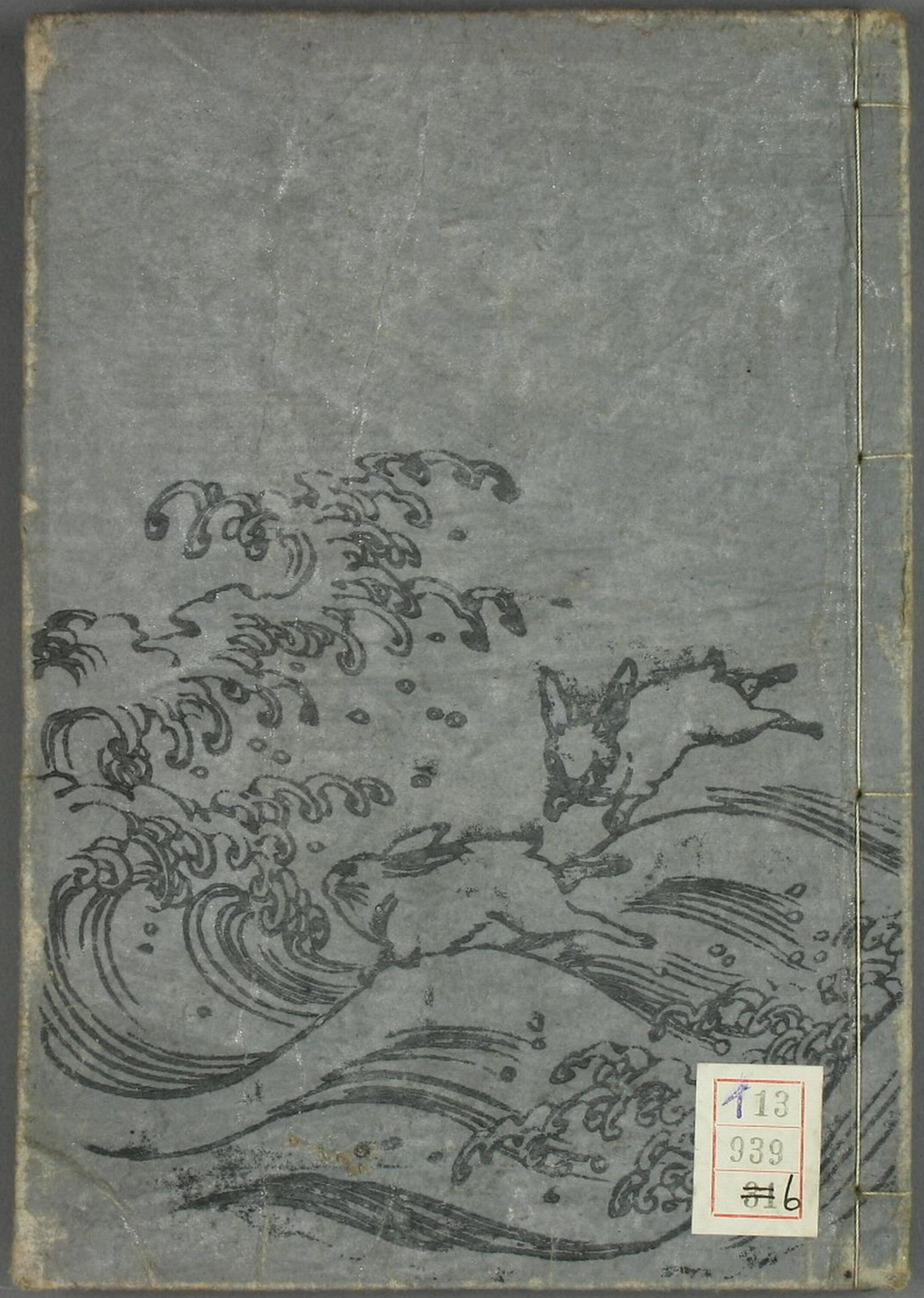


113
939
#6

門イ 13
939
巻 313

曲亭馬琴編輯　丁丑孟春
福祿壽號

朝夷巡嶋記第二編

一柳齋豊廣畫　書肆
文金堂梓

有序

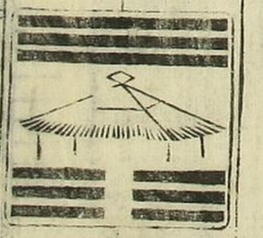
丙子玄月朝夷記後集成矣客見其藁而丐閲未許客艴然不悅遂嘲予曰夫齊諧小説之鼻祖也源語女史之巨擘也然無益名教自是以降瑣瑣稗説年變時化又不乏其才雖錦心繡口有可愛者其於裨益彌遠矣子亦以彼爲祖乎以此爲師乎費思慮於戲墨不知老

大正十年二月 北房文庫氏寄贈

之將至謂之智可乎窺新奇於時好敢
欲殉于名利謂之才可乎夫爲大釣者
得鯛魚爲小釣者守鯢鮒其於得大魚
難矣飾小說以醒蒙昧其於大達亦難
矣今見子頭髮種種營衛且衰益非著
述之勞歟予曰然有其事物之嗜欲不
一鯛雖難得貪以死餌士雖懷道貪以
死祿不亦悲哉是故善釣者必細其綸
芳其餌而引魚于千仞之下若以直針
爲釣維何魚之能得由此觀之好師於
人者有口無行猶直針而爲釣也崇論
閎議亦無裨益名教解也固陋非有用
之器自知散材不遊于高搦管臨硯池
著書令賁之萬事無心與釣翁一般雖
然不羨磻溪玉璜之祥嘗獨坐蓬閣以
觀浙俗長短經綸以揣情致於是其言

爲餌勸懲爲鈎投竿於江湖者有年矣
巨口細鱗集其淵往來傍觀之人愛其
魚相樂而不去心在灌瀆則無風波之
患日爲引鮹鱓不與人爭利一釣一得
以畜數口耳簑笠之外又無餘樂其樂
乃以延年何疲勞之有乎物之嗜欲不
一客則以此爲患苦解則以此爲嬉樂
氷炭不合皮此異其趣是以不得聽命
也客喟然嘆曰昔者聖人以道德爲竿
綸以仁義爲鈎餌投之天地閑則萬物
其有也子亦知而言之乎予笑而不應
客去將序於是編即陳此事顏于簡端
文化十三年立冬後一日

簑笠漁隱識



朝夷巡嶋記全傳 初輯第二編總目録

第十一條　射向鳥證据　樹間隱返命

第十二條　卜繕葺夜醮　黑白谷地蕎

第十三條　過去來會話　巖堰水煩禁

第十四條　紈柳廿廿井　嵒神地藏會

第十五條　戮惡劍山麓　慶善百田宿

第十六條　迎旭汀友鶴　吟風溪髑髏

第十七條　磨出礪並月　占夢黑川堂

第十八條　苗頃時濁水　客去鴈春霜

第十九條　野干玉罩燈　蘇彌深袖巾

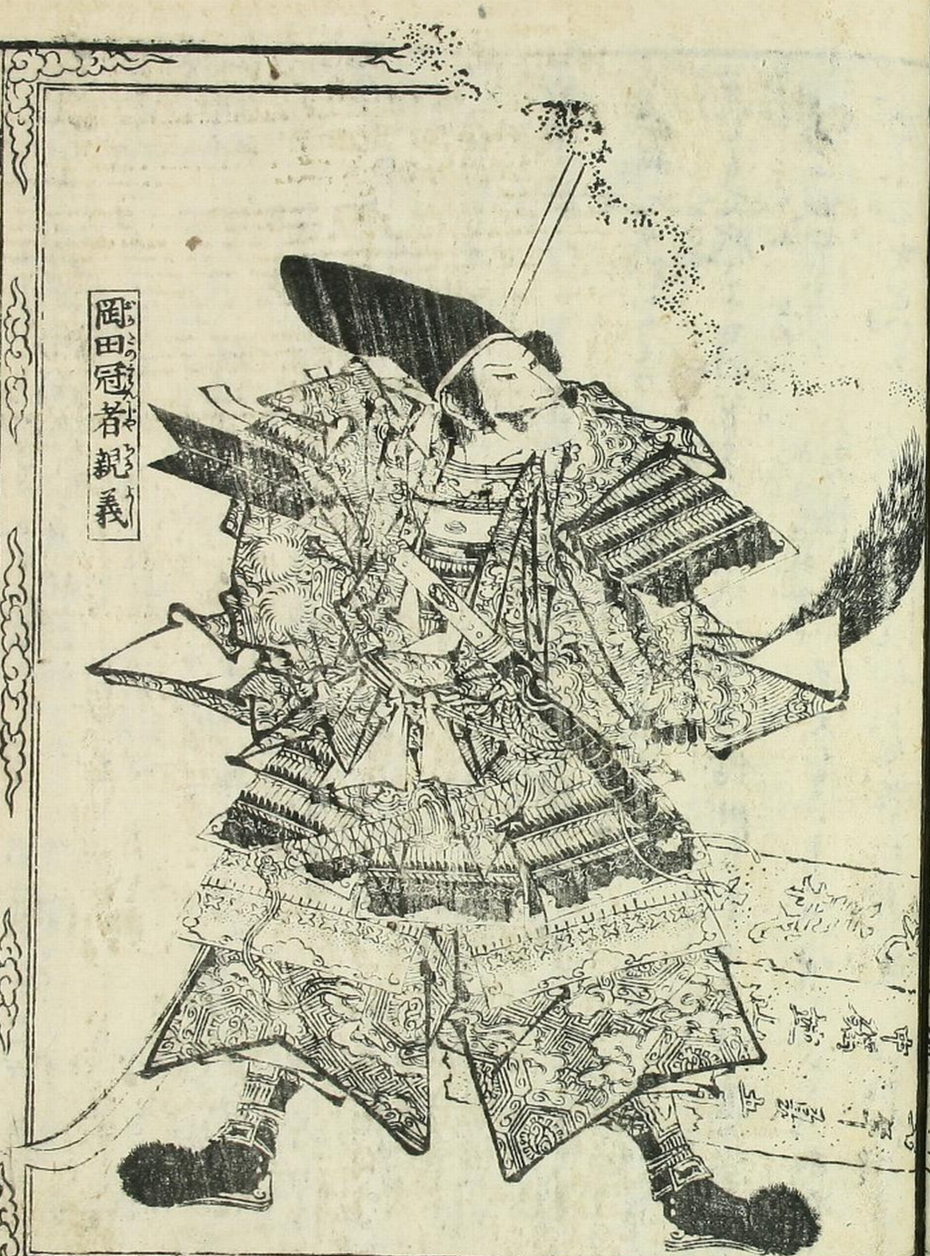
第二十條　綱總袴游偵　假裝東情郎

此編以十巻二十條ヲ爲初輯二十條ヨリ以下ヲ爲中輯當陸續刊行ス焉其一十條以上ハ見初編第一巻繡像右

聚噪斜陽外群飛暮雨中
八嶋室平師任
源良井
早蝿五頭平
鳴子の引太郎

草裏不知終
露尾
山前唯解暗藏頭
御前判五ゝ妻

庄司曙の一三
小三二


岡田冠者親義

一生富貴
皆空夢
千古英
雄只斷碑
巴の陸

余嘗思ふ大約坊間印行の草紙物語ハ五分の訛謬あるも他ハ草帝を
さそおもつてこれを數人毎編倉卒の間ハ成る稿を易るに暇あぜ
一段稿ゞ了まバ一段備書ハ附屬ハ一巻浄書をしバ一巻棗人ハ遞与ひ彼我
その工拙を貪ること速なんと欲せ序故ハ作者といへども坐ハ謬る作者まづ
謬て備書画工謬る書画謬る棗人又謬る。棗人謬るといへども書肆も亦後
改ふハ疎なりいまゞその失を補ひ得ぜ。そもそ製本裝貼を於是閏人
推蒙競ふ。ものを閲ずして句讀を紕て語勢を失ひ文義を謬ざる
もち稀ことれをもゞ著編の五謬とそいひつる。就中この書ハ前板棗人の
力をもて成るものゝと多ふ或ハ圈点傍訓を削去て或ハ真名を削去く
補ふハ假字を以て。筑紫琴を銃紫と。忍えをへとし。ひねをいとし。去りゞを
ーとしてれをハとも。よろづをよろずと。もしも義ハおいく違ざれども去り上ハおくの

假字。ーハ下ハつくの假字。ーハ下ハつくの假字。れハも亦これハ同じ。彫刻かくの如く恐ずと紀。
辟ハ蠅頭塗鴉の如し。作者といへども読ざるとあり。書肆をこれハ驚ざれ。
為ハその拙を補ひ削成へるところくを修復せんとするハ比校ハ稿本を
獲ざると紀。彼此ハ多くく惑ふ遂ハ背をせとし。あゝきをあにごとし。
痛ーれをいくハ紀とするハ類趣ふ。びゝ出ーハ作者意外の失ふ。京人
魯魚烏焉馬の嘆あり經傳方書といへども。誤衍あ紀とをるぜ。
況ンや燈下の戲墨鑿空垂根の書ハおいく自その謬を論ずハ足ざれぜ。
彼も一時ことれも亦一時ことも苟も文場ハ遊戯ることの。悞脱錯字を免
知るて。改るハふ多くて江湖上ハ弄責せバいとも愧べ紀ふなりぜ。余
ハの淺をもて書肆ハ示ハを再四書肆余ゞ言を理あるとしく教諭を
棗人ハ待ハ棗人慚愧して刀を竊ぜ。此度ハもつく工を擇むとひ彼我力を

戯もうと既ハ刊字ちぐさんの如くなれバ佳本なるを得ぬべし人に賢と不肖とあり。至べバ不肖も賢なるべし技に巧と拙とありよくその心を用ると能ハ拙も巧に捷となりん抑余が拙をもて世の看官に棄られざるハ用心かくの如くにして固くその愚を守れバなるべし益京摂ハ名工多かり書肆ハ梓を蔵るに富て製本に精妙之唯余が著編毎歳秋後に俄頃に研を發くをもて刊刻の日久しからざれバよりて多く謬あり致古人風葉の喩に感じて五謬を辨じて自笑をとるのみ。

蓑笠漁隠再識

家傳神女湯　一包代百銅

婦人つ血虫の妙薬　一包代六十四銅　半包三十二銅

婦人諸病の良剤第一産前後ちの道即功あり効能詳に此書の初篇に載たり

つ血虫ハさらなり産後なりあらゆるきゝに用ひて極めてよし

精製奇應丸　大包代銀弐朱　中包代壹匁　小包代五分　但しさし賣不仕候

薬種をえらみ製方を精細にするをもてその功ハ神妙也

製薬弁弘所　江戸飯田町中坂下　南側四方みそ店の向　瀧澤氏精製

取次所　▲江戸芝神明前　和泉屋市兵衛　▲大坂心斎橋筋唐物町　河内屋太助

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之一

東都　曲亭主人編輯

初輯第十一

射向の鳥の證据　樹間隠れ返命

建仁元年辛酉春三月。朝夷三郎義秀ハ大石山の猟倉より刀野時夏が獵箭に漏せる。野雉を矢庭に射て落し。渠が誇るを呼禁めて。滋藤の弓挟さみつゝ樹蔭より出しかバ。彼ハ只あきれてやかて。衆皆呆れて目を注し忽地に奥さわよりり。當下義秀ハ彼主従を佶とえて。わとり近く進ミ寄たる弓を憂哩と捨て。時夏義邦まち對ひ恭しく手を膝に加えて目礼を去ぐけれバ。義邦ハ遽しく礼を返しつ慇懃にその名を問んとする程に時夏面火の如く。衝と出て立塞り弓杖突て義秀を見て睨視て声をふり立和主

いつるものなるべし。こゝ射くおとせしこの野雞を奪ひとらんとこゝ謀るぞや。めづらしこの
鳥惜むよわゝ孤ど獵箭に漆りそ。平〳〵くつぶ名と写てあり。然るに横畧せれ
こゝ。當坐の恥辱後日の批判ひつまゝく脱るゝ。ものくても和主よ證やある。
あらぬとのゝ弓矢八幡ちをべえて去せど。と敦圍迫弓を捨刀の鞘よりを
抜るゝ義邦吐嗟と推禁めこゝ短慮あり刀野生滅中人とあゞ〳〵よこの名も
問ぐ繫果さゞ後悔其処さこちらこゝ。ゝ〳〵この人小賊心あいゝ。野雞叢よ
落〳〵と。奪ひとりて走らんよ。ゝ禁ゝ〳〵弓矢の古実。戦場の相撲ゝ〳〵
爭ひありとぞ。ぞ。その故ゝ〳〵とのゝ〳〵ゝ且某よ任せぬと。和譚て義秀よ
うち對ひ何國の人と知ぞ〳〵。言卒介ゝ似られども。ゝるゝ〳〵黙坐りと。
一隻の野雞よ二人のゝ〳〵ゝれと定るゝつゝも鳥小立る箭よゝ〳〵めゝ〳〵
平〳〵證いゝ。介るよ野雞を射すりとゝ。和厳ゝも又證據ありるゝ告て

疑惑を散さゝぬ抑和厳ゝ何処ゝり何の郷〳〵ゝ〳〵ゝ箭推ゝ〳〵
ひとり。樵夫ゝ外ゝ途もるゝ。この山と踰ゝ安ん。姓名群よ聞ゝ。暮告
ぬと真成よ問ゝ〳〵義秀ゝ莞介とうち笑ゝ〳〵ゝ所ゝよゝ〳〵ひの端を
復きゝ今更よ問ゝぞも告ぞゝんや。某原ゝ安房國大鄰の浮浪人朝夷三郎
義秀とのゝめゝ故ゝ〳〵故郷をうち去ゝ。去歳ゝり下總の許我よをり。
當國の學校小笛學の志願あれば。師の紹介よ任〳〵ゝある人を訪んとゝ。
けゝ〳〵もゝ地よ来著〳〵。山ゝ〳〵ゝれどの山よ獵倉ゝと呼ゝ〳〵ゝ。其処よ
望ゝ失ひつ。春の日影のゝほ高ゝるよ。羽立と契るゝ待不樂〳〵ゝ〳〵彼処へ
赴ゝ。對面せゞゝと思ゝまゝん。熟ぬ山路を辛〳〵。ゝ〳〵この芝生よ弓箭ゝり。
楚人ゝ送ゝ〳〵故事も。有繋よゝ思ゝれゝ。兄過〳〵ゝ取ゝゝ兄ゝ
その前よ漆〳〵。時夏と写〳〵ゝり。原来彼方ゝるゝの遠弓ゝぞゝんぞゝん。

これをめて推量るに。相去ること遠くいあひだ。これも鳥とれ獣とれ。いざや射とりて見ん。未の牽出物よりもいざそれ。とゝとぎらつて登り来る。樹暗茂を向上とへ倍羅麼野雞の声高く。どうとをさつと立ちどよ。弓は前刺ひく掛よまれば。樹蔭とメ三ヨ三く矢ごろよ。ろ引搬ばゞ行ぜ。鳥は叢の中ゝ落たり。ゆるとカ称ゝ打れ射とり。彼射とりとく誇ぬ。某も又奥よ来ど大人氣なくも禁ゝ。とゝは時夏冷笑人口さびしくも調歌す。證をとられてもぞ。拾ひ〜とひかをの弓箭が。物いひもせで七人をも歌け。證人ゝ胡乱の争ひ。ひよ〜以堪ぐさ〜。證人ゝとく出せ。ぞ。と逼捕ふ。義秀うちうそ些も驚ぐ。原来和君は弓箭のうよりはして未熟ゝ。證人を向まぞもす〜。野雞は立さる箭とゝぬ。鏃は胸より背へ出う。各位は立鳥ぞ。抵く射ぬ。その箭正〜く立りのうらべ。必腹より項へ出なん。

某は彼処より。向ひざまよ射く落せ〜。射向の箭ゝを正〜く證据。これを否せば和君の箭ぶ。ぬ過とゝ立ゝて。鳥はひとつ貫ぐ。胸より背へ出ゝ。ゝ一句も出せ口と喝て眼を睜て。両三歩ぶ。ぞよ逡巡〜くけ目ぞ主の後方よ仆る。時夏ぶ私卒并平ゝ苦〜しげよ身を辟う。列卒ゝ目と往紀袖を掩き堪ぬ笑ひと咲ひよ。紛〜つゝひとう。義邪愧さるよりちまく。芝折敷て片膝と著て。ぶぶと嘆息〜。面目もなく三郎どの。吾ゝ武弁の家ま生れて不覚の争ひ及ぶる若輩の一とゝぶぶろ。併寒郷よ人となるぶ民師ふ遇ぶ。弓箭よ煕煉せぶれいく。民田舎児の頑冥ゝ。ぶひ捨て許容あらん。和様ゝ某ゝ面とかこと心地〜く。秋ひ立てまんりのう。とゝと叮嚀よ勧解らまく。義秀も又貌を改め分よ過ぐる和君の和論痛入くゝ。

射向を辨ずるく義秀

時夏を説彼を

廣みち

ようなぎ

ほさ平

時ちつ

某とても村落の人とありてはべれば鎌倉様の風流は弘めまゐ。武藝を嗜むとのふまぐゆゑ。古実なんどと解しまゐることれ〜かるとぞ況やまゐさんや。人力遊山を妨げず身の樂をまとぐもあらば。不憶弓箭を獲つれば。訪ふ人は見来の産出物欲得とぞひつることを将推氣の僻事なりけるされば武藝は未熟なる某は射く落まゐ〜。野雉が不幸に似れども原その弓箭のまゐ〜なるしあらぐ武器と擇ぬふ。ねの本事はさぞおらんは射外しぬふは千慮の一失そこと某が愁の功名は定られ。孤疑を散さるあひぬ寔はあまりぬ幸なり。あんまと抗さもあひねと謙まるく却人と貶さぬ大丈夫の器量さてそと義邦はいまく感じくことと慰め既は斯ち解てべ。隔ぬぐはたならぐ。何人と訪んとまく。途の疲労と厭ぐは高峯をとて登りぬひ〜。その名は何とぬぬめぞと問まく義秀うち点頭某が訪ふはべ。

その中ぬてそまるまぬで先より云云と告く問べく思ひ〜は寔は不憶のあまはまゐ。言はぐ遑あらざりぬ吉見冠者と呼れぬふは和君はまゐ〜ぐや。れまぐ尋る人さ。とぬを義邦笑あぐ某則吉見の郷士源義邦なり。されば安房ぬも下總はも相識ぬのいあらぐるはいふ〜まくまぐ名とぐまく和殿はまゐれけんどひるひるぬ幸ぬ紹介の書状あぐ賜てはと疑ひの解ぬもさてそと義秀は懷中ぬる畳紙より一通をとる出〜ぬ某が武術の師たる〜健田秀作老人の尺牘ぐ當國學校の学頭まとぬ〜はそ。筠長老の舊友なれぐぬ一通と寄せるは不幸ぬ〜長老は三年已前は迂化のう〜。学校はまくぐぬ〜ぐめまく笑つ手〜ぬ夫ふのまるぬぐ。進退其処は究りてはべ。又ひるはともぐたまぐ。切く彼長老の由縁の人れぬぐ。ぬ〜ぬ〜ぬ。請問〜はぬる人答く。さまぐぬとは思今の学頭は真言密宗の碩学まぐ。

理真上人とぞ申すなるべしとぞ。筠長老の弟子なる孫ゞ由縁もなし。
字吉見とかの地方の冠者義邦とかの人丁七筠長老の弟子なるべく。舊縁も
大かたなるべく孫ゞ其外へ問たく問ふ。と誨らるる憑〻くと。吉見は起て又
さらば山路を投く推て来せり。長老近化去のひとつの一通と誰ゆうんせん。
幸ゆゑく乗られざる。轍魚輙江河に入り。病蓬搏く蔓花を倒むそれなる
はゝくいんと。速訖て紹双の一通をさゝるまゝ義邦い飲然と封を披て
読べし。繰返しく巻收め某齢のほかく富のみもわらざるに賢才を
扶持せんと。相応らぬ所行なれども。筠長老をおろかあてよ来たれし人を
留ざるんや。從僕に案内をさせるん。吉見の宿所へ起たゆく。某い獵箭を
納めく。迹ゆりてと叮嚀に応つ後方より仕り。江三廣光をうかゝうく。
繹のおろをゆるさせんとおの氣色に廣光い主のほとりへ進て来る。時夏へ

退たく。床几に尻をうちかけく。あと又た頭を低。又ひとつのもなるべし。
今この件の向答を受なく床几をとるうち。凜〻く廣光を推ゞ先て進て
生氣をこと乘げ。恭しく。義秀のうち對ひ面目のや總の客人其ゆ箭を
るとともなるべく。射向の鳥はおろかつゞ。過言の罪い徒地。多を卑く勸解
ける。某固より冠者と。同郷はおく竹馬の友ゆ。數るく孫ども刀野太郎
時夏と呼くゆめ。されば冠者と蟲ゆ。賭鳥を射んと約せ。貫ゞおろの
怨るれば賢へ慮る掛られて。又再会も期ゞそれど野外に麗酒を酌ゞく。
直に別れんい遺憾〻。あの山の麓に。ト繕とかい賽法師あり。這奴繹内に入
なべく。肉を食ひ酒を嗜む。嗚呼あるべきのよあるれども。その性愚直ゆゑく
客を愛せり。某年来抱主とゝ。とゝもく夜食をとゝまれば冠者ゆも
おくれゝゆゆり。齋の野雞おゆあり。且ト繕が庵に伴ひ盃を勧めく後に。

和殿のうへともめく。吉見ぬ〜と相謀らん。枉て彼処へ赴くべ。他事るく賠話て誘引ば。義邦も亦こを欣び。刀野ぬ〜旅を飾ることうく。身を遣て客を愛せるこそ。庶ふ所なり。必ず推辞ぬひそと共侶ふ勸つ。辭を竭て親切ふ。義秀面目身ふあり。聊も推辞ぜ。某文武修行の為一処不住のものなる。過世ひつる契やありけん。両君遐棄ぬべ。この身不肖ふいとも義ふ仕て死とるも悔ず。況交を結んとて。美酒佳肴さへ設るふ。何処ともあざくんやひと欣ち。伊。愉く諾ひ〜ふ。義邦ふ。ふもこそ〜。時夏ぞ〜欣びて。ちくんまぶ客人を。こぶ従僕并平ちと。ト結庵へ送らとぞし。めくい稀なる歡會ふ。野雞のこふく者をけやて。某ハ冠者とふ。平時射獵て彼処ふ聚会んこそ思さびや。とえくをば義邦ちろ。ゆそくふの織寔ふちるべ。ぞ和殿の後者達を労せんとふ。ふめば。

三二とうそとのぜも果ず。時夏ぞ頭をちち掉て。和殿ハ後者とく。あくべ。彼ト結ハ基ら恩顧のあれぞ。ひへば他〜人ふハ任せず〜。もとれ并平と。時夏ぞ時夏ふ後者媚子并平享年ふ廿一歳面白く眉秀ぐ。人品骨相時ふ。ぞ。ふ鉢の身甲小品草の擘ふ臑縛ちく〜ふと精悍〜ふ打扮。ふ。間と衣つ凛〜く。主のわとりふ跪坐くと。時夏ぞ結とて。汝ふの客人ニト結庵へ案内せよ。此路ふ目ば鬼魅猛獣の患ふ。といひぐ〜。ろの弓箭と進ろて。唯ぞ射く落せ。〜臆〜ふ不覚をとらば。汝ぞ越度のこるべ。禍ふ身ふ及びるん。ふろ泊ろや。と首ぞ諭〜ふ〜ふ箭こうあげく。遽ふ受て挾ふ御てろを泊くいるり。途ふて寝ふるもの。則主君の怨敵ふり。鬼神ともいひぐのぞ。もべうもいひぐ。御ろ安くとうとぞ。ふ時夏莞爾と笑こそ。ぞ〜ちわろ。こと。いそぜば。

井平い義秀よりこそ對ひて額をつけ。ゐん鄉導仕ん誘ゆへとく先よ
立義秀ゑれを労ひて。義邦時夏よ辞別を。林麓をさ　そゆく行よ井平い
弓をとりて。道りの草を拂つ。麓のくへ廿餘町。ちや三十町ゆ来ぬんとゑの
比忽地よ立在て。義秀よりち對ひ。ゑの処よりト徭庵へ。路一條ゆ。遠
くゑ。某い身の暇をぬり。主よ従ひて行もるく。復見来よ入ぐ元ゑり。曩
よいゐん身ゲ射藝俊才一殷一言よあくられて。ふく感ぐる所ご微軀魯
鈍俗眼ごをども。既よ豪傑るゑ〜とあれど。ゆ〜への人の言葉よ交淺〜く。
言深ゆ元のい愚ご。身賤〜く。貴きと犯ゆるのい惑ひ。ゆゑご信ぜられぜて。
諫るのい譏るご。ゆゑ。ゑのゆれい人よゆゑ。む宜くゑざる所ゆ。ゑれ慎ひ元と
なをども。ゆで止んいるるくよ。心つ元なた所ゆ。ゆ〜と。罪を英士よ贖ふ時
なの。ゆて不肖を顧ぜ。微生ゲ信よ傚ふのゆ。夫良禽い樹を擇ぐ。明
君い臣を擇む。今の世い臣も亦宜く君を擇べ。ゆふぜん某い不幸よ〜と良
主よ沿遇ぜ。ゆゑとく苟よも。ゆの禄を食るのい善悪よ就き。邪正よ就き。
主命惟聽ざゑんや。ゑれよ違ゆ身と亡ぜゆ提徑を用くよ似ゆ。ゑれ勇も矯る
べゑ。智も亦ゑ〜ゑ。人を識るのい不慮の仇ゆ。身を衛るのい。
危きよ近つぐ。ゆゑ。猛元獣又悍き猪ゆ。又をり〜山賊生。某さよ
ゆ前をりて。ゆん身ゆるよ。ゆゑ。みづ〜ゆ。禦元ゆゑ元ゆゑ元
ゆゑと述元て嘆息ぜ。義秀つ〜とうちゆて。ゆゑ小膝を礪と拍吁
賢ゆるゑみ。媼子生ゑれ金玉の高論ゑ。惜べ〜ゆ。子を。御士の扱ぜ。ゆし
ゑ。造化の神の僻事なゑん。ゆゑ〜所悉ゆゆゑを。ゑ〜ゑれ。某り〜當
囮ゆ。ゑ〜く留るゑゆゑ。必一言の信よ酬ん賢ゆるゑゆと感嘆ゑ。ゆ
別るよ忍びゑぜ。井平も又嗟嘆ゑ。今い〜も時夏ゲ。ゑぜ待ゆ。ゆゑん。

ト猪庵の前面の陰より。遥よりある森のこなたに大竹藪を背負へる。草室ふ
しく。鄰家のけはひ。其処ぐらもひそまり。隠れおるべきもひそまり。急なれと指しく。
可嘗よ。説示せば。義秀ちびくうち点頭ぶ。和殿を労しうり。退りぬべ。両君よ。
待なるとヤシてたゞ。ゆうべとぞうとひらげく。彼草庵へとぞうりぬく。井平へ
舊の路へ帰るとうえせく。佶とうえくう。猛よ弓箭の後ひく。満月の如く
弯絞り。竈固めく。弾と射る。弦音とろ共よ。義秀うえ。身を倫く。避れば
獨箭へ頂と。幽揺ぞうよ四丈あまり。前面へ翦く松の緑へ一揺揚くぞうり
け。行くもあらぬ射掛る。この箭を。義秀右の袂よ受くとあ引抜乗てうも
ひくらん。悠然とひく後影を。井平雲時目送りて。吁と一声嘆賞し。合はする
弓をとり直しく。獵場のくさへ還りけり。さる程よ力野太郎時夏へ御高よへ
義邦ホよ憚ひく。機密と井平よ示ひうよ及ぶ。渠ぞうが意中と察せ〜欲。

いかゝ思ふらんと。想像のこゝろ。ひく心ひとのゝれば狙獵よ假托く衆人を
離れつく。村覩のくさ〜五六町。漫走ぞる程よ井平へ弓を引搖く。遥よ登り来よ
けはひ時夏へよと抗て遽しく。こゝ招ぎ。こゝ拒を遅しと。樹の蔭へ召入ふく
声を潜し。鄰高よ視目が灸れば明く地よいぶ。被る謎を何とぞ解る。
素浪人奴いかゝぞや。と向へ井平さんは。朝夷を送れとく。弓箭をあらるゝ。
あん辨の端大〜〜。推量しくゆへ。彼奴を射く落〜主君の恥と雪ん。
と思ふのくゝ色ぞうもえぞ。緑陰ぶく別を告遣ぞ過しよつ。只
一箭ぞ。ぞうよ似ぞ射損〜たゞ心忙く。蔑つ二の箭も身よ沼ぞ。僅よ
秩を縫留ぞり。然れども朝夷へ騒ぎぞる氣色もなく。徐よその箭を抜
乗てえうへもぞぐ陰をぞりぬ。某既よ二條の獨箭を他よ失ひ。愁よ
大力數よぞるとも。ぞうふべうもひく追救ぬれぬを幸ぞうひ。

彼人の勇敢武藝當今無雙とのふべき欤。毛を吹て疵を求んとう。御ふろを轉ー。只信をのそくん和睦ルべしと諫れば時夏安く大息吻て。原来彼朝夷奴いとのーよりん癖者なり。汝が諫言その拙あれども。今さらに支垣結ぶ。されば彼奴を殺されるん然とて林鹿を會せざる。憶ちうとおもれん世淺究めて難義なりいつふせきと。顔を拊て困ー果る主の顔ぶたくとうち熟視てさるぶーたいぶ。某一ッの計あり。箇様ことを宜いして酒宴の席を某をもて撃ようせんと敦圍なば。人々諫て敢へべー。當下君ハ怒と鎮めて。某を遠離なば。朝夷めるるべちりいるんられを射るハ井平ぶ。たひらの所為はして。主命をいなくざりたとその疑ひを解とたハ。あんずの後暗らん。ぬくく彼壮士を信をのく交りなりぬぶ。よ紀背有るべきれの後ハいくと老実ぶちく。密語ぶうち点頭ての計究ー妙ん。汝頻を朝夷ぶ勇敢武藝を稱賛されども。これ何とも思ぬ。真実を和睦の事い。今ちして議をぶん當座の難義を脱きんまへの計略をちんのの。假を汝を勘當ーく。吉見冠者を預べー。且く彼処を身を寓く。よつたぬくを就窮をとるへ報知せよられ又後日を較計あり。努偏とる。と口を抹めく。躰く樹蔭を立出ハ日ハ西山の傾ぬ落処を義邦ハ野が列平とぶ從僕廣光ホを將く彼此と時夏伐ぶ弦ん。端ちくちを聚合ほどを。時夏遥をれをとく。呵ことちち笑ひ吉見生吉見生井平ハ客人を送り届く今還りぬ。そもくて獲ものなり。ト紹庵へ退りん。誘ぬと。ちれば義邦も笑ぶ。遽ちくのほとふ丘ふ。何とものぶ。えあるべ山中あるようちもおうとぶそこ一遍ぶたり。義秀の結んを誘ことのりけく。井平を労ひつ。時夏と推並びて麓の庵へ

却くるぞ。江三と井平はあの〳〵主の後より跟き後る〳〵列卒をゆそじ立て。衆皆山をこでゝるのるべ〳〵。

初輯第十二

卜繕庵の夜醼　黒白谷れ地苗

却説時夏義邦ハト繕庵ふるよければ。ゆくゆくより列卒ゑ暇をとらせて。留守さつるのゑ消息を告ふとく宿所へゆ〳〵義秀ハ菴主の僧ト繕共侶出迎て。衆皆子舎ゑ聚合ほどゑ。時夏ハ今繕もせで上座ゑ坐ゑ坐し。義邦ハその次ゑをり。義秀ハ対ひて。賓の座ゑ著しゝ。江廣光ハ癇たる。偏提を披て盃をとゝ光。賓主て後ゑちとけく。物語ひと真わりさる程ゑト繕ハ遠〳〵庖温ゑ入りて。圓頂ゑ拭の箒を掛方肩ゑ糾苧の裕結あげて。獲りの鳥を庖丁し。菜園の青菘。竹林の春筍。種〻の料理

あて衆人を饗応れハ。余殊更ゑ美味ゑ入て。不典の數りさあり。義邦古今の治乱を譚じ。義ハ文武の奥義を論る。言の葉種の彼錦。たゝ〳〵惜き團坐なれハ。長き春の日とや暮て。燭を継ども餘真あり。義邦ゑ古の席ゑ。井平が付ぬをあろゑ〳〵誘ひて。時夏ゑ向ひ覚めでゝと人ゑも云せ。和君が愛臣ハ何処へ退る。めく〳〵真ある酒宴なるに。渠が付ぬハいかゞやと問ると。時夏ハ笑ひて。盃を釀浄めて。義秀ゑ勧め。既ゑ英士ゑ邂逅て。来会を辱て。只恨む郊外の夜歌の目ぶとるのるゝ。ゆ〳〵聊用意せる。一種の肴を進せん。願ハ〻の盃を挙ゆと。述て座ゑ入て。ト繕ハ道向ゑ命せ。肴をそゆく進せよと。戸高ゆ水吸立れハ。庖温のゝ〳〵より阿と応て。ト繕ハ井平を。蜘ゑ捆ゑ縛て。〳〵や。縁頰ゑ牽居て。義邦主後この光景ゑ呆然ひく目を注し。

時ろう
ようふ
行ひる
廣光
時夏
好計
芋平を
製んとせ

且くい辭を出さず。義秀は默然として熟視くをる程に。時夏は義邦が許しゆえといひあへず刀を引提。衝と立て。緣頰より跳り出。刀の提緒を結び締びて。野袴の稜襖を井平を佶と睨視くそ背後より立ながらに義秀をうち對ひ朝夷生とあくりや。この者は時夏が東道の寸志なり。とぐりまてこの吉見ぬ。緯のおろをとるくめるべし。曩に某此奴に乞客人を送りもるより箭を預遣せしは猛獸毒蛇を防ぎるるとなりとやてををさん。かるに此奴が生才学に主の恥を雪んとて。緣阪より立別に獵箭二條射ひけしかども。幸にして客人を傷らず。阿容ことくまつ云云と告く勸解しに忽地に胷淡まつく。憤に堪ざれども。路次のゆゑ思ひて氣なく。おのところへ倶して歩つ。ト儀に依おろるさしてやや傳さく。暦つるく。某実に推氣の徳朝夷生と獲りのを爭ひ。こく過言を吐といくとも。先邪を悔こに露ばかりも。宿意を送とるひるに。執念深此奴が怪しくく。泥塗されしに面をいつ。そ向べに腹立とも朽をとも。ゆゑ述彈きくしてあく今眼前芹が頭を刎く。朋友の信を表せんとて。者に盃をめぐしぬくといひあへ。刃を晃と引接て。欽念せよと振揚ぶ。吐嗟と騒ぐ義邦主後起んとすれば義秀はいちはやく走り蒐て。時夏を推禁め。やよ時夏君が誠心言ゆくく至り盡せり。某が所望の者は御家臣の越度を宥めく。あの席より待しあくそれを過る饗応爭。曩ゆゑおなくすまり途ゆく。前箭より袂を縫れ。されども御家臣が叫ぶこさる小鳥を射んとそ思ひ。義犯ひし仇箭よりそと思ひけ。ばあるるけど酒宴の興そのあるやうち忘れくいひ。やあの壯佼が某を射くれバとく。淺痍負くといふものくを又主命を稟むとも。主のゆゑ怨を復さず。是則忠臣し。

某浅智短才なれども忠義の人を殺しは忍びず。両降く壊固く人を推く
更に憑しめ懲しめべし又某を何とぞ。枉て刃を納めと辭退
竭しく禁ぜ。義邦も亦廣光もろ共その前より後より。辭齊一諫
す。三郎既に惻隱の心あり。怨をもて仇に報ひず。信をもて渠を乞理義と
述べ救ひ。現實主團坐しく。歎びを盡を折に人を罪せんよろ
きなあくん。義邦不肖なるとも。和殿のみに井平を教訓しそこび恨
あらずとぞ。又他事もなくと。和諭られる言葉小携る。井平を悲
げに冠者の君救せ。菴主出家のうるさ。博るとも又さらに勸解りや
ちんとぞ。ふに似ず。えくのことるあもり小苛刻と怨ぜれば。ト縊ハあそ〳〵
進に出醫師ハ人を活せども人病ざれば醫師ハ富ど出家ハ殺生せざれた。
夙く死後出家ハ肥ぜ。目を無迹本地とふ法衣の袖に被うと。

入道ぞ分際ど。及ぬとぞ。推黙りくいひ。ぞ出
地ぞん。諸君辞を弾ぞ赦せ。我意に募せ。似り。
御許容願ひ。と蟬声立て口説け。晴夏ハ喪人に悲ぜ。
刃を聲に納め。足を蹴揚て井平を。縁頼り衝落し。命に冥加ある
奴り。三郎冠者の面に覩ぜ。刃に鮮ら。只ハ正に今日より勘當ぞと
罵り懲しぞ。義邦より對ひ。彼奴ハ原鎌倉ぞ。親族ぞ。
追ぞ。とぞ。それ将事を送に似ぞと執ねとぞ。且く
彼奴を貴宅に関ん。誤を改めべくハ。教訓して賜てん。とぞ。義邦大変
歎びそハ願しぞ。廣光ぞと相謀り。風諫を加べ。主のべのに
役に立べき壮佼り。義邦預り。ねり舊の席に著と。勸て聽て
廣光に井平ぞ。得を。解て。庖偏に退て。賓主齊一席に。

盃をめぐらせ給ふ。美秀數盃を強られて。美邦に讓る物ゝ。冠者の素うり酒を嗜ず。盃を受つゝも。困じてせんとぞ。のがるゝと時夏うちえゝて冷笑ひ吉見ゐ苦しくい某助くさまるゝ。何ぞ某心を用ひて。客人に奉せり。和殿も奉ぜよといふれて美邦うち微笑ひ勿論のことゝ。何をぐゝと筋を揚て。折敷の肉を引よせれば時夏急に推林ゐ某一種の所望ありこの奉をぬぐぶ。和殿に代りて一度に物ゝ數盃とのふとも辞ぜらるゝと。色ゝ美邦頭を傾け。某不才ゝの意を曉らぐ。身に相応ゝ物ゝぶ。何ぞ宜ゐれ。ようけぬぐらんと。諾ひる。面答に時夏大きに歡び。ちゝんぬ。

朝夷生は筑長老を心あてに。長老近化ゝぬひつゝぞ。由縁といひのゝ。寓居は和殿の宿所に限らず。便宜に就てゐるとも何ぐふとろひべたるゝとの客人を。某が宿所に伴ひ留て誠心、竭をべ。所詮の奉は則ち。然ぐの家僕井平が。不良のゝを挾て。罪を謝せるよりなり。とゝれて美邦貌を改め刀野ぬゝの懇望を。不吝ゐるあゝ。ゝ

どもこのゝうけ引ゝ。筑長老はいぐ師ゝ。又外戚の一族ゝ。長老会ゝ亡とゝ。とゝ。泉ゝてゝ。朝夷ぬゝを他ゝ人に任用せんゐそ。美ゐあゝぐといを。も果ゝ。時夏は折敷を搔遣り。進ゝ出ゝいゝ。吉見生所望の奉ゝとゝ。せんと諾ひゝは食言欲。某既に井平を。和殿に預けまゐらせゝ。ゐれば又朝夷生を。某預りて扶持せんと。是當然の理ゐあらぐや。と言語せしく。教園は美邦騒ぐ気色ゝ。教諭の趣ゐゝを沿ぐ。和殿が家僕の罪あると。朝夷ぬゝとは換ゝ。況奉は酒に加えゝ。口腹に充るものゝ。彼朗詠今様は盃を勸る料に。酒宴の奥を資れども。これをゝ奉といふべゝぐ。客人を弄びゝ。これを奉ゝとゝいぐ。ゐるに不敬にはいぐぞと。詰れは

時夏ともく被き立過言く美邦和殿のぞり富さうえく客を留る餘財をそる。時夏いるとすぐれの欲賭うけする客人を阿容ミと遮えやと罵狂べト徒廣光間よ入りく時夏をさめくか和譚れども醉る人の癖るといるは置くと詈止ちび美秀いこの光景よいるも嘆息。某何等の洪福ありく。両君争ひのみそぐよ鍾愛せるとやんちいあれども躬ひとりと列ちて争ひを止るよ由ゑ。某あり両君の中違ふべ一日もこの地よ脚を駐めるく。他郷へ赴ゆんとい果て立んとそ。時夏これよ難美ーく。ト徒よ目を注それ。件の人道さいろを汚さ。鮑て美秀を推ぬ客人且く坐ーゆ貪道恥商量あり。枉て且く坐ーゆと推居く時夏と美邦よりち對ひ力祢仏の争ひ友よ信を失ひと。ふのふよる起れ。孰を褒ぐれを貶ん客人の身と置りみて他郷へ退りゆんといるも宜るぐ。

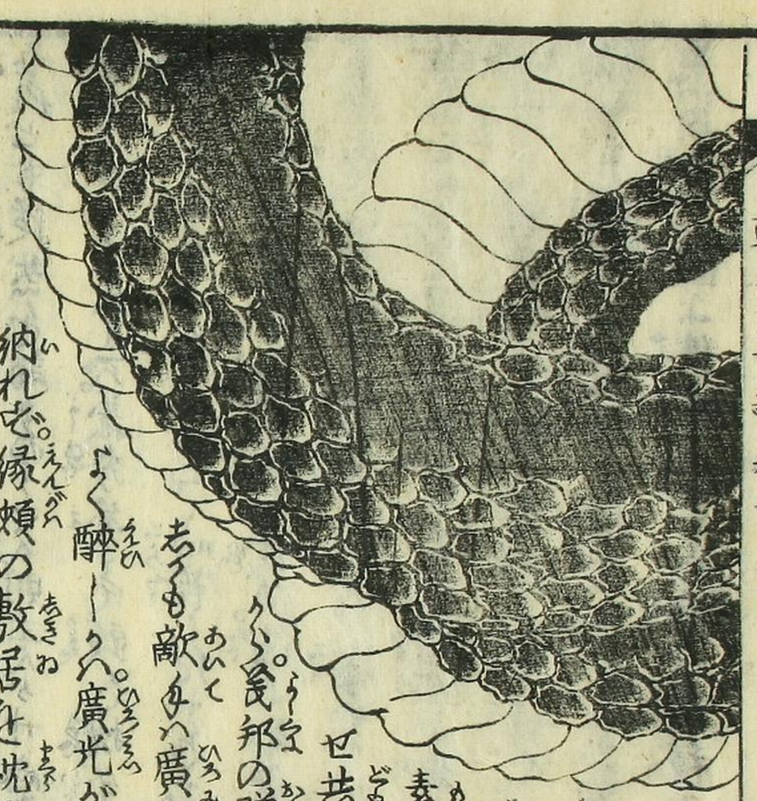
愚按ふいひども。當庵室を旅宿ちく。客人を留めゆぐ。その争ひ頃よ鮮てぐれも優劣ぜび。琢客を逐ふ識もあいどうち仕せのいり。と老実ぐちて和諭ふ時夏ゆく莞爾と笑ミ。ふ議れちるべ。冠者のさいろを知ざるのことといひくそのさを佶とんる。然られども美邦ふ。ゆを又たくりのいりぐ。廣光ハ倚痛くく。主の袂を掖動ー目と住せく誄ーふ美邦ゆ。面をとあるく。扇を笏よとり直ー。酒気よ乗ー由もるた言葉闘ひ惻愧ふ堪ゑ。菴主の和諭承知り。三郎ちけ引ゆんや。といのれく美秀一議よ及ゑ。君ふハそのの居のゆをたを求めゑ。況万里の逆旅ふあり。孰の処とち。宿とせざんとそれくまれ各位の扶助をとそと。衣しぐ美邦時夏大きよ歓び。ちらぐ衣食い月毎よ両家より調進ぐ。両三月も壁ちんふ。学校へハ入ー。留子の成るべたゑ。その狂とぞい寂寞ともふ。ちよ起居去ぬくとと憑ーく慰れハ。

義秀も亦これを歎ひ、ものづうを酌を熟つ。盃を交めく。時夏と義邦の和睦の餞を扱へ。両人それも及ばずとく。且くい辞ひ〜。遂に盃を交易〜く。宿意を遂さでとぞ誓ひる。此彼の向答に春の短夜曉ぬ。東の山際ちらむ比時夏が従僕五六人。馬の轡牽立く。主の迎ふとく来られいとぶ盃盤を納めさせ。時夏義邦辭齊一ト儕を労ひく。義秀がるを憑ぶ少え當座の施物として。二色の白銀十緡の青銭を出あ。時夏い馬ようら乗り。従僕等ふ先を追〜。て。栄門を出〜ら。義邦い叮嚀に義秀に別を告。廣光幷平ホを招く立出れ。義秀ト儕い遠〜く。縁頬のほとりまつ。雲妻時ひるを見送りね。却説朝夷三郎義秀。ひらけるく山ふとろる草の庵に留ぬ。けいと暮〜。羽立と明せば言葉敵もるぬ。まつ〜とたふ。ちうとの下野いのすへより。学校頽廢せざるもるまを。鄙あれど才子多

くて。吉見冠者い温順なり。貴人公子といぐいいるん。刀野太郎い好智なり。才を妬む賢を賊ふ。ひとあろ〜ぬ人とのいは。江三い篤實なり。諸侯の家老となるべ。ぬの欲ざるまでも。媼子幷平い奇方なく。信義あり。渠を主を仍ぎれども。主のみよせざるとなり。彼時夏が怨るる。り。幷平微り必不義に陷ふなん。緑阪ゆそ幷平がこれを射つ。主命なるべ。先をあ。ろ〜ぬ。とまとうさせ。後に射ひ〜い忠なり義なり。そその罪を負ふ。員と。主の隱慝を顕さる。凡慮の及ぶ所よりあらぐ。今これをもそ。ると。撫るに吉見主従ふ交るべ〜。幷平ま親むべ〜。時夏ま近づ。ろ〜。そが方人なる菴主の入道ト儕ま。ふうち解て。相譚ろ〜。と深念〜。さ〜。對ひるとぬ。物ひろひく雑談せば。又時夏が宿所より贈る酒食ハ。ろ〜。先ト儕に飲食させ。そのちるるぞ。ハ筋をとらば。めくもぞ用心

されば如何。訴へとそよみもの。時夏も美邦もをりく詣まで後然を訊慰め。
ト繕ハ心を切てうれよ仕るめ〻如く。歎待真成なりしかさのこいとく疑ふ。片
山蔭ハ春暮れて。酷暑ハ堪ね六月の上院ハなるゆれる。峯吹おろし朝の
風檐下ハ吹る夕の雲。雨て六月を搖流も。背門の覓の水音さへ。夏を忘る
ゝ。現山居の甲斐ある。と云へ里もなつ〻ぐ。日毎ハ彼此を縋細
と耶庵の背ハ。いと大なる竹藪ありて。山の峽
より南ハ入ること千尋の谷ゆへ。樵夫も知らず。谷の底間られハ黒白谷と
なり。有一日又美秀ハ筍を掘んとて。鍬を引提て出る折美邦の使とて。
江三二廣光ハ小厮ハ偏提折櫃を齎て。紫門のあるさとり。美脱とり
入ハ美秀ハ安くもられを見て。こハ〻くてそとゞ〻りハ。秋金ハ知りて
先ハ主脱て母屋ハ誘引ぞト繕ハ懷〻く。茶椀を濯て茶をもめ。送る

恙なを祝〻祝されて。既ハ坐も定て。當下三三廣光ハ小厮ハ
折櫃と。偏提をかとる迄。朝夷ぬ〻この二種ハめつらるゝぬめ
られども後然を訪はゝる。則主人が寸志なり。めさるべくもやとハ〻けて。
恭〻くさ〻られ。義秀笑て頭を掛。今ハ〻ぬ吉見ぬ〻の好意
報ぜるハ時ゝ〻ん。とハ〻心苦〻紀まぐハ。辱〻。ことを翳〻く。被酒
者をあ〻ハ。ト繕ハ涎を拭ひ。消〻めゆる夏の日ハ。酒ほど原〻紀
りハ〻。江生もけハの暑ハ。途ぐら堪ぐ。偏提を被て
あ〻ぐ。間仕〻ん。と老実ごて。地坂ハ鹿栞を焼〻られハ美秀も笑
ハ入ぐ。退〻んとハ廣光を。ゆ〻ぐ。貧主三人小厮さ石のぼ〻ぐ。
端ち〻う図〻〻。偏提を披紀者をとり〻け。盃の隙ぐ紀ぞる。巴の字ハ
めぐ〻し。杏の圖ハ往返〻。〻〻椎〻時移るまぐ。おの〻数盃を傾け。



めくてちや。未の下刻よりしくべ。廣光は別を告。小厮を倶
さそく遠く。かつる後送る毫秀へ。
素より酒量廣きく。一斗を盡
せ共酩酊せず。乱るゝことなる。
あも敵なは廣光。とれは愛。彼はめぐ。ところ
よく醉〳〵る。廣光が如くと歩く。盃盤もとり
納れど。縁頰の敷居を枕に高鼾して熟睡り。早て
夢とそよさ〳〵と悪寒〳〵。毛骨いよ〳〵立つよおぼえく。忽地に驚た
覚。とえれば母屋の簷端より。布よ仍く長たる。諸折戸の裡まぐ被

やく。日影を掩ふ可きもの。やづちづよ身を起。つらくえれば其の太サ。臼よ
ひろ。紀巴蛇が。母屋の屋棟より庭のくさへ半身を出せ。なり。その長サを推
ちれい尾いな母竹林よあるなべ。黒白谷のかとりよ毒蛇ありと。笑つるう。
這奴るべ。とちよるぞ。敬吉衛の為ふとく。義邦の屋敷。弓箭めいとて。あつ引
固えく。矢声をうけく切て。殺せ。箭は。怨ぞ巴蛇の咽喉をぐさと。串さる。時よ
天地震動して。その音菴も崩るく可よ。大蛇は全身より落て。荒浪の打ごく。
伸つ屈つ苦めば。義秀得さり。とうれを棄く。倶利迦羅の大刀を。引抜た大
蛇の背へのぼ。つく。その心下を九刀。十刀あまり刺さりけ。現不動三
麻の邪の刃の奇特よりさるうん。よ。未曽有の毒蛇なれど。ぶちか
息絶てり。死て後又つらく視るよその形状のおそろしげる。背の
苔むしく。鱗いさるぐ。松よある。鳶紅葉よ異るらぐ。天その腹を。譬て

朝入る
巴蛇を
ト猪庵が義秀
まろをとる

ゆゑ。江に横さふ虹のごく。淺緑ふ〻く光あり。眼は百煉の鏡のごく。歯は五並の
鋒に似うるあり。あるとき毒蛇人を呑んとて。ひとごとその腹に至らば。胃
より上は口中にあり。もと足は腮にさがりそのの人右手に刀をとり。什麼何
人ぞとおくに問ふ。衣の色に覚あり。こは紛ふべうもあらぬ竜王と名乗りし
ゆゑ。武秀詐りそふ申す。ト借るとどう分際ぞめる大蛇を見られば。とく刀をあげて
向んや。ありもの賽法師。こう醉臥うる折を窺て。庭のうさぎ近つけそく。狙
殺めんとする程に。ちらゝび大蛇に呑れ一なられん。彼ふぐ刀を含む王相応
くぬ死ざるを。密書やあるとそとりごらして。そがやく裡面に走り入り。渠が調
度を展検るに果しく時夏より遣りする。数通の状あり。そが中に朝夷ふ
酒を強く。ひふきくに醉臥さを。竊に殺して死骸を棄ふと正しく書るの
あるべ。呵〻とうち笑ひ。鳥は林に隠れく鳴ども。もの声必外に聞ゆ。人い

竊に謀れども。あくられぞとのふとす。楊震が四知の誡果せるあるとひとり点
頭件の状を巻きめ。ぞ鞘の赴を吉見へ告んとぞ。里遠ければ人もなし
蛇毒に觸るとく疲労うり。偏提に餘りはあるべ。又一碗を傾けそともあくも
もべられと。忽ち躍て盃を拭ひ伸めて跳子を打らせ。独酌ふてぞ居さりける。
作者ト猶は肉食米糞の法師に且當時兵乱騒壊の後なれば。素人とは
とゝどる。兵器を嗜むとのふべくぞ。あれども庵中に兵器を貯るとは。その野
心あく顕るゝを。ぞ作ぞ又武邦は固より時夏を疑へりさぞも山中非常の
准備に武秀がみるとそ。弓箭を留めもくとあべ。これを前に防らぐ武秀が
蛇を射るに及びぞ。ちくに猛に武邦が弓箭を留めくるとのふ。地蜘の言と
時夏ぞ陰憑再く顕るゝをぞ。ちくにそとの所為。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之一 終

鎌倉
和田倉
圖書

早稲田大学図書館
011888007212